

「皇帝への税金」

2014年10月24日

マルコによる福音書 12章 13節～17節。 さて、人々は、イエスの言葉じりをとらえて陥れようとして、ファリサイ派やヘロデ派の人を数人イエスのところに遣わした。彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。ところで、皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか。」イエスは、彼らの下心を見抜いて言われた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい。」彼らがそれを持って来ると、イエスは、「これは、だれの肖像と銘か」と言われた。彼らが、「皇帝のものです」と言うと、イエスは言われた。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」彼らはイエスの答えに驚き入った。

エルサレム神殿当局は、主イエスを陥れようとファリサイ派とヘロデ派の人々を遣わした。ファリサイ派はモーセの律法を守る愛国主義者である。ヘロデ派はローマ支配を甘受する親ローマ派である。両者は「犬猿の仲」であった。敵の敵は味方という訳で、両者は結託して、自分たちの用意した問いに自信を持って主イエスのところに来た。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからない方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです」という丁寧な挨拶に表れている。問いは「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか。納めるべきでしょうか、納めてはならないのでしょうか」であった。当時、ローマへの納税が課せられていた。これは、律法に適っているかどうか。適っていると答えれば、ローマを恐れる者として、ファリサイ派の攻撃材料となる。適っていないと答えれば、ローマへの反逆者として、ヘロデ派の攻撃材料となる。「イエス」とも「ノー」とも答えられない「両刃の剣」であった。それが、彼らの自信の問いかけであった。

主イエスは、違う立場の両者が結託して問うてきた下心を見抜いていた。「なぜ、わたしを試そうとするのか。デナリオン銀貨を持って来て見せなさい」と言うと、銀貨が持ってこられた。「これは、だれの肖像と銘か」と問うと、「皇帝のものです」と答えた。銀貨にはローマ皇帝の肖像と銘が刻まれていた。主イエスは「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われた。この答えに、彼らは言葉を失い、立ち去った。

「皇帝のものは皇帝に」とはローマへの納税を認めるという言葉であろう。「神のものは神に」の「神のもの」とは何か。①「心の信仰」と理解する。この世のルールは守るが、信仰は神のものであり、それは神のみに返す。政治と宗教を分離しなさいということになる。政教分離の近代法を知る者には理解し易い解釈である。②「エルサレム神殿への献金」と理解する。ファリサイ派は献金を強要した。ヘロデ派はローマへの納税を強要した。それぞれの立場で、義務を強要しているお前たちは、このような問いを持って来ることはできないだろうと、問いそのものを無価値とする返答と理解される。③「イスラエルの大地」と理解する。ローマへの納税を認めるが、大地は神のものである。その大地は神に返しなさい。主イエスはローマ支配を受け入れていたが、侵すことのできない大地への信仰があり、愛国主義的な考えを持っていたという理解になる。私は ② の理解を受け入れる。主イエスは諸々の出会いの中で、生きた言葉で応じている。ファリサイ派とヘロデ派を相対化して、彼らの問いを無意味として葬り去ったのではないか。